



病し、死んでしまいうことも多かったそうだ。  
そんな過去を持つ場所とは深く考えずに、  
私は小学校四年生の夏休みに広島原爆ドーム  
と原爆資料館を訪れた。最初は興味がなく、  
退屈さえ感じながら親の後ろをついていった  
私だったが、館内に入った途端、それは変わった  
った。気付いたら、悲惨な展示物を見て私は  
心打たれていた。その頃感じたことは幼い頃  
の出来事だから鮮明には覚えていない。しか  
し少なくとも他人事のような「かわいそう」  
という軽い気持ちではなかった。背中に大火  
傷を負った女性の写真や、人かどうか判別が  
できないぐらい火傷を負った子供の写真など  
重く受け止めなければならぬものをたくさ  
ん見た。痛々しく見るのもつらかった。けれ  
どもなぜか展示物から目を逸らせなかった。  
目の前にある広島悲惨な過去を、見て見ぬ  
ふりをするのはなんだか後ろめたかったのか  
もしれない。当時の私は恐怖心に駆られてい  
たと思う。けれどもその日から私の中で確か

に、何かが変わった。  
このような私の幼い頃の記憶を中学三年生  
になった今思い出す。そして、この日本の悲  
惨な歴史は、私たちの記憶の中で決して忘れ  
てはならないことだと気付かされた。日本は  
原爆経験者の高齢化が問題になっている。つ  
まり戦争の悲惨さを語り継ぐ人が減っている  
ということだ。この問題は非常に深刻である  
私たちにできることは、戦争を遠い存在だと  
思わず、辛い過去と向き合い、長く長く人々  
の記憶にとどめておくことだ。  
もしかしたら日本は原子爆弾を落とされた  
という歴史上の事実があるからこそ、今の平  
和な日々を手に入れることができたのではない  
いか。そう考えることもできる。当時の人々  
の、「もうこんな出来事を繰り返してはなら  
ない。」「もう誰にもこんな思いをしてほしく  
ない。」という切実な思いが、今に繋がって  
るのではないだろうか。

今の私たちの日常の暮らしを継続していく

。

、

